

担いで運ばれた布団

中丸 道彦

アパートで一人暮らしをしている。平日は寝るだけの部屋だが、土日は一日じゅう家にいることも多い。静かで良いところだ。しかし、セールスマンが多い。先程も布団屋が来た。

布団屋は高級羽毛布団を売り歩いていて、丈夫で長持ちするらしい。

今使っている布団は引越しのときに用意した。二、三年使った後に捨ててしまっても惜しくはない値段だった。

布団屋は「昔は打ち直しと言って中の綿を取りかえていましたが、今はそんなことをしなくても三十年はもちます」と言っていた。びっくりする程の値段だった。これから出かけるからと言って帰ってもらった。

「打ち直し」という言葉を聞いたのは久しぶりだ。私がかだ小学生だったころ、片田舎にある実家では、畳みの上に布団を広げて、中にある綿を新しいものと入れかえていた。

季節は思い出せないが定期的に行っていたと思う。割烹着を着て三角巾を頭に巻いた祖母と母の横で手伝った記憶がある。手伝ったと言えば聞こえはいいが、実際は、走り回って邪魔をしていただけだ。それでも、布団の中から茶色に変色した古い綿を取り出して、真っ白な新しい綿を詰めこんだことは覚えている。

祖母は「戦争中はこんな贅沢なことはできなかつた」とい

つも言っていた。母はどんなときでも正座をして手を動かしていた。祖母は十年前に死んだ。母は遺暦を過ぎた。二人には、布団を使い捨てる生活など想像もつかないだろうなと思つた。

そんなことを考えながら、布団屋が帰った後の部屋を見渡してみた。子どもが走り回れるほどの広さはないが、布団、洋服、組み立て式の机、テレビや冷蔵庫などの電化製品が目についた。改めて考えてみると、それら全てを使い捨てるつもりでいることに気が付いた。

若いころに実家を飛び出してから、何度も引越しを繰り返している。引越しをするたびに荷物は減った。自分のいるべき場所はここではない、そう思い続けているうちに三十一歳になった。

父は、故郷を出たことがない人だ。生まれてからずっと同じ場所で暮らしている。そう遠くはない未来に、そこで死ぬだろう。高校を卒業した私が東京へ行くときに、「俺の感覚だと、長男が親と離れて暮らすなんて考えられない」と言っていた。

父の父、私から見ると祖父になる人も、故郷で死んだ。父から、祖父が死んだときの話を聞いたことがある。祖父は復員してすぐに交通事故で死んだ。

祖父が死んだ日は、めずらしく家族で一緒に夕食をとるこ
とになっていたそうだ。祖父の帰りを待っていたが、何時に

なっても祖父は帰ってこなかった。

そのうちに、町で一軒だけ電話を引いてあった家に、連絡が入った。車にはねられた祖父が病院に運ばれたことを知ったそうだ。祖父は即死だったので、連絡を受けたときは既に死んでいたのだが、電話では詳しい事情は知らされなかった。

けがをしているのに、地べたに寝かされていたらかわいそうだということになって、少年だった父が布団を担いで、二十キロ先にある病院まで走って行ったそうだ。

「途中で巡査に呼び止められて、ほら、夜中に布団を担いで走ってたら怪しいと思うだろ。でも、事情を話したら同情してくれて、病院までいっしょに付いて来てくれた」

昔を思い返しているときの父のなつかしそうな顔を、今でも覚えている。

先日、同窓会に出席した。仲間が何人か集まった。顔は昔のままだったが、生活にはいろいろな変化があったようだ。結婚して家を買った者もいれば、転職して故郷に帰っていた者もいた。この年代になれば、誰でも、自分がおさまるべき場所を探しはじめるようだ。

「お前は、まだ実家帰んないの」

同じ釜の飯を食ってきた友人に聞かれた。

「帰りたいけど、まだ、帰れない」

そう答えておいた。